



岬の山から見おろした牛深港の突端。



三角港として水揚場の活気が見られるのも特長の一つ。



観光客の出入りもふえつつあるこの頃。



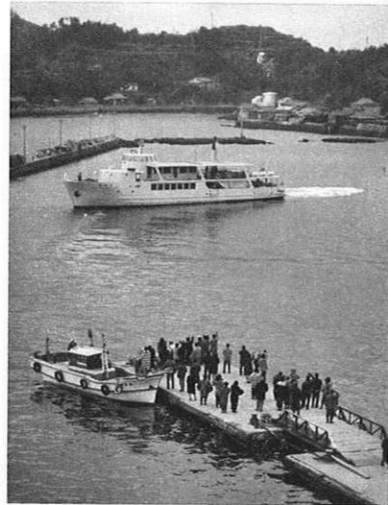
波止場は昔ながらの魚売りのオバサンたちの勇ましいかけ声があふれている。

★くまもとカメラスケッチ

港 (その4)

牛 深 港

牛深は、天草の南の玄関口。牛深市は人口3万人。昔から鰯網漁業の基地としてさかえ、明治40年ごろから急速に発展した漁港。市の中心にある遠見山は標高217メートル。山頂からは牛深市内はもとより、南天草の島々が手にとるように見渡される。牛深港からは水俣へのフェリーボートが発着しており、港は着々と整備されている。観光では、南九州へのコースもひらけつつある。



6 交通量調査、橋梁荷重計算、流量計算、水稲品種改良計算、人口推計

概ね以上のようなものが挙げられる。これらの事務は、従来いづれも膨大な人員と時間を要していたが、電子計算機が処理できるようになってからは、短時間のうちに、然も正確な事務処理が可能となり、行政サービスが飛躍的に向上したといえることができる。



＜カードをパンチするキーパンチャー＞

5 造林補助金計算、森林計画編成集計事務

造林補助金の計算は従来、約二カ月を費していたが、機械化により、僅か一週間で済ませている。このため、森林保険契約を直ちに行なうことができ、被保険者には大変有利になった。

その他、技術計算を電子計算機で処理しているものでは、次のようなものがある。

電子計算機の導入は人員節減にもなり得たか

もちろん、大幅な人員の節減が可能であった。

導入当時、県が行なった調査では『約百四十人』の事務量を機械におきかえることができた。しかも、年をおうごとに電子計算機の活用は拡大されてきているので、実際は、この数をさらに上回るものとみられる。

一方において、新空港建設、九州縦貫道建設、交通安全対策、公害対策等、経済の高度成長による本県の発展過程として必然的に生じた新しい行政需要があり、この対策として一課四室四事業所の機構を新設した。又、従来から行なってきた仕事のうちでも、業務量の増加を伴う分野、たとえば、公共事業、社会福祉等の部門を充実させた。

このため、昭和三十三年から現在までに、二百四十五人の人員を必要としたが、県では、電子計算機導入により約百四十人を省み出し、残りの必要人員も事務の簡素化、能率化等これに対処した。

従って、今のところでは、県の歳出予算額でみても、過去四年間で約七割の事業量の増大があったにもかかわらず、サービス行政部門の強化を図りつつ、しかも実際には一人の増員さえも必要とせず切り抜けてきた。

ちなみに、本県では、過去四年間、定数は一人もふやさず据えおいているが、これは、ひとえにこのように事務の能率化・簡素化に努めたたまものであり、今後ともさらにこの方向を堅持していくこととなる。

電子計算機の活用は、今後どんな方向に進むべきか

このように電子計算機の導入は、県行政の改革ともいふべきさまざまな働きを示しているが、それでも本来、電子計算機が内包する機能からすれば、なお一層の活用は十分に期待できる。

即ち、今までの利用は、定型業務の大量処理に優先活用されていたが、今後は更に高度の利用つまり合理的な経営政策・県計画の策定等の管理に役立つ日がくることも決して夢ではない。

県では、導入当初、全国都道府県に先んじて機械化を決断したが、最近の各府県の動向によれば、ようやく導入の必要性が論じられており、その意味では先見性があったと言っても過言ではなからう。既に、本県では更に高度の利用をめざして、例えば、地域開発研究基金を利用し、地域計量モデルを作成する等の研究を、各県より一歩先んじたところで進めている。

今後、更に、行政サービスの向上をめざして、長期的展望に基づく科学的行政を実現させる体制が着々と整備されていくであろう。

そのためには、まず何よりも、電子計算機を活用する主体としての人間の変革が要請されよう。合理的で広い視野を持つ理知的な人間、しかも機械に疎外されない強い意志と暖かいヒューマニティを有する人間こそが、初めて電子計算機を良く駆使することができる。

そのような人間像をめざして県職員の能力開発を積極的に進めてゆくことが必要であり、そのためには県民の暖かい協力と理解が望まれる。このようにして初めて本県も新しい情報管理時代に飛躍することができるようである。

(人事課・電子計算課)